

[報文]

経済近代化過程における農村女性の就業実態と改善の課題
——スリランカの中部水田地域を対象として——

カンカーニゲ エランガ ハサンティ*・カンカーニゲ ラール**・今井 健***

Actual Conditions and Potential Improved Opportunities for Rural
Women's Employment in Modern Society
——Rice Farm Village of Sri Lanka——

Eranga Hasanthi Kankanige, Lal Kankanige, Ken Imai

Rice is the staple food of the nation of Sri Lanka and more than 10% of the country's people depend on paddy cultivation. It is widely agreed that reliance on female labor in rice farming agriculture is very important. In reality, a woman's time is allocated mainly for reproductive activities such as child bearing and rearing, and production activities such as animal husbandry and cultivating food crops. Therefore, the role of women is distinct from that of men, and trends indicate that women encounter difficulties in their lives. The purpose of this study is to clarify the social status and economic environment of rural women. Recently in Sri Lanka, women search for employment in the industrial sector and in the other sectors such as self employment, due to ongoing problems in the agricultural sector, and at the same time they face competition in the prevailing society.

[キーワード]

開発途上国 developing country, 農村女性の経済的自立 financial independence of the women farmer in rural communities, 農業以外の副業 side business in non-agricultural sectors, 農村工業 factories in the rural communities

1. 研究の目的と調査地域の概況

(1) 研究の目的と背景

世界の人口の約78%は開発途上国に集中し、アジア女性の3分の2以上は農村に住んでいると推定されている。女性は、農村労働力の60%以上を占めており、開発途上国の農村女性は、農業生産において重要な役割を果たし、また農家の家計においても多大な貢献をしているにもかかわらず、

その社会的地位は低い状況に置かれている¹⁾。

スリランカはイギリスの植民地から1948年に「社会主義国」として独立したが、1977年以降は市場経済システムにもとづく開放経済政策がとられ、経済成長率は以前より高い水準となった。

独立以降のスリランカの最大の経済的課題の1つは農業近代化のための農業開発であった。灌漑用水の確保など国際的な支援を受けて農業基盤の開発が進められ、1990年代には国民の主食である米の国内自給が稲作の発展によって達成された。同時に農村でも非農業部門の産業が発展して、非農

*岐阜大学大学院連合農学研究科, **岐阜大学大学院連合農学研究科(卒業生), ***岐阜大学応用生物科学部

表1 農村女性の副業等の種類別従事者数

(単位:人)

		農業経営面積規模別階層			
		計	小	中	大
実人数		44	10	14	20
	うち副業等の非従事者	0	0	0	4
	うち副業等従事者実人数	40	10	14	16
副業的な農業	家畜・畑	15	1	3	11
	苗販売	4	1	2	1
	農作物の加工・販売	3	0	1	2
その他の副業	レンガ作り・販売	4	2	2	0
	仕立業	3	1	2	0
	日用品販売	3	1	2	0
	手芸作り・販売	2	0	0	2
賃金労働	農業賃金労働	5	4	1	0
	農業外(工場)賃金労働	7	5	2	0
業種別計		46	15	15	16

注：小は面積規模3.5エーカー未満，中は3.5～5.4エーカー，大は5.5エーカー以上である。「業種別計」は複数の副業等に従事する者も業種別にそれぞれカウントした人数の計である。データソースは2004年の現地での農家調査結果である。以下の表も同様。

業部門の雇用が拡大し、また家業としての農業以外にも農業での季節労働や様々な副業などの兼業に従事する農家世帯員が増え、農村女性の間でも兼業就業が一般化している。最近では輸出指向型衣料工業の展開が見られ、それらの非農業部門からの所得が農家所得に占める比率が高まっていることも報告されている (World Bank, 1996)。

スリランカにおけるマクロ的な経済発展に関する研究や農業構造に関する分析報告は少なくない²⁾。しかし、農業社会においてもっとも低い地位と経済状況にある農村女性の労働と生活実態を実証的に分析した研究は少ない。そこで本研究は、開発途上国の中でも、いち早く経済開放政策に移行し比較的高い経済成長を遂げてきたスリランカ農村の女性の農外就業と農業・家庭内の役割と地位に関して、その実態を実証的に考察することにより、スリランカ農村女性の課題を明らかにしたい。本研究ではそのために農村女性の自家農業以外の副業や雇用における就業内容や収入などの実態調査を行った。

(2) 調査地域の概況

調査対象地域はスリランカの中部に位置するアヌラーダプラ県エッパウラ村で、代表的な米生産地帯である。スリランカの稲作農業の発展のために設定された最大の農業開発である「マハベリ農業開発事業」もこのアヌラーダプラ地域から始められた。エッパウラ村の農家族はおよそ1,200

世帯で、人口は約6,000人、そのなかで女性は約2,880人である。同村の農業に従事している女性で調査可能な44人に聞き取り調査を行った³⁾。

調査対象農家44戸の全てが家業として水田農業をしている。平均経営規模は1戸あたり約4.7エーカーであるが、面積規模別にみると5.5エーカー以上の大規模農家は20戸(45%)、3.5～5.5エーカーの中規模農家は14戸(32%)、3.5エーカー以下の小規模農家10戸(23%)に分けられる。畑では年間通してスパイス類(唐辛子、コリアンダー、ペパー、クミン)、野菜、豆、果物などが作られている。大規模農家ではスパイスなどの商品作物が栽培され、中規模農家と小規模農家では野菜、芋類などの自家用の作物栽培が比較的多く見られる。

家畜については、この地域はまだ畜力で農作業が行われることが多く、そのため水牛の世話のほかには乳牛(自家用・販売用)、鶏(卵・肉用)が飼養されているが、それらは大規模農家に集中している。

また、生産者米価の低下と生産資材費の高騰によってこれまでのように稲作収入だけでは生計が維持できなくなり、世帯主の副業や兼業就業、新しい商品作物の栽培が進み、農家の収入源が多様化している。調査対象農家44戸のうち26人の世帯主は自家農業に従事するほか、副業や兼業に従事している。

2. 農村女性の就業実態

(1) 家族構成と女性の仕事

調査した女性の家族の形態は、2世帯か3世帯同居が多く、夫婦だけの核家族は44戸のうち2戸だけである。女性の結婚年齢は都市の女性と比べ早く、出産も30歳までには終わるのが一般的である。家事育児は家族の女性全員で行われ、また子育てに関しては、地域ぐるみで行っている場合が多く見られるが、近年では幼稚園などの幼児教育施設が地域内で増えている。

調査地域における女性の生活時間は、調査結果によると、それぞれの平均時間は、家業である農業は5.2時間、家事・育児は3.4時間、副業などは6.1時間であり、平均して1日15時間ほど労働していることになる。比較的若い年齢で結婚出産を終え、同居している親もまだ若く家事・育児ができるため、女性は自家農業の作業はないときは、他の副業に従事するなど農外で副業する機会が増えている。

(2) 副業および兼業就業形態

調査地域の女性の間では、家業である農業のほかに自分の副業や兼業に従事している女性が多く見られる。1つの副業・兼業に従事する場合と、1つ以上の副業・兼業に従事して場合があるが、表1にみるように、その内容によって3つの類型に区分できる。

1) 副的な農業の諸形態

①家畜飼養

特に伝統的農村の多くの女性が、自家消費や販売目的に数羽の鶏を飼っている。彼女たちの話では昼間は放し飼いにし、特別な世話はせず、夜間は家の中か外のかごに入れられる。その中でも地鶏の産む卵は特別の風味と味わいがあるため、よく売れるので地鶏を飼っている女性が多い。鶏は卵用と肉用に飼っていて、卵を集めて定期的に販売し、肉用ブロイラーチキンは3ヶ月に1回程度、業者に売り、再びひよこから育てる。したがって多少の資金が必要だが、手元にある資金に応じてはじめられるのが魅力的である。この副業

の収入は比較的安定していて、小規模農家の女性が多く従事している。

また乳牛飼養も自給用と販売用を兼ねており、朝と夕方に搾乳して店頭へ運び、または頼まれる各家に配達し、1週間ごとに集金する。

畑作物としては女性が1人で管理できるような短期間の唐辛子、トウモロコシなどの商品作物を小面積栽培している場合が多い。

②苗販売

イモ類・野菜・花などの苗販売で、季節的な仕事であり、収入は少ないが重労働ではないことが魅力的である。

③農作物の加工・販売

地域の野菜を使ってピクルスなどを作り、また果物からジャム・マーメイドなどを作り口コミで、また近くの朝市で販売している。

スパイス類は乾燥させてパウダー状にし、コロンボのマーケットに出す業者に売る。しかしスリランカは1年中同じ気候でほとんどの作物は年中とれ、まだ農産物加工商品の需要は増加していないため、副業する人も少ない。

2) 農業関係以外の副業

①レンガ作り・販売

地元の赤土を利用してレンガを作り、村の内外で販売する。日干しレンガで自然材料利用のため経費は少ないが重労働である。最近では、セメントでブロック作りもあるが、経費がかかり値段が高いため売れ行きがあまり良くないという。

②仕立業

女性服・子供服・枕カバー・シーツなどの仕立てで、生地から自分で購入し仕立てて売る場合と委託を受ける場合と2通りある。他の副業と異なって一定の技術習得が必要とされる副業であり、収入も良く、人気が高い。

③日用品販売

小規模農家の女性の副業として多く、自宅の一角で、野菜・果物・魚の干物・香辛料・タバコ・灯油などを売る。またはウィークリーマーケット(週2回の朝市)で、自分の作物や近所の農家から買い取ったものを売る。冷凍などの設備がないため、すぐに商品が悪くならないものを用意し、値段は自分で決める。調査地ではスーパーが身近にないため利用も多く、安定している商売であ

る。

④手芸品の制作と販売

アクセサリや飾り物を作り、イベント等で販売する。安定性が低い重労働ではなく、自由にできる。売る機会が少ないことが難点である。

3) 賃金労働の諸形態

①農業での賃金労働

常雇いと季節雇いという2つのタイプがあり、大規模農家での労働の場合は長期間で同じ雇い主の下で働き、賃金の変化は見られない。季節労働の場合は短期間で雇い主が変わるのが特徴で主に水田、唐辛子、豆・その他スパイス類の栽培でよく見られ、作業内容や季節によって賃金の変化がある。中小規模農家の女性の副業が多い。

労働の1日は朝8時30分から始まり、夕方6時までで1日3回の休憩がある。1日の平均的な賃金は男性は500ルピー（日本円換算で537円）で女性は350ルピー（同376円）と、女性の賃金は男性と比べ70%に過ぎない。

②農村工場での賃金労働

2003年にこの地域にも輸出指向型の衣料工場（MP社）が設立され、主として若い男女が工場で働いている。この工場は元首都コロomboの空港近くにある縫製企業の農村工場の1つで、ここでは子供服を中心に、生地染め、ボタン・リボン作りが行われている。工場では、早番と遅番のシフトで仕事時間帯が決められているため、農業に関わる時間以外に従事できる仕事として働いている人も多い。長期間就業者の場合は、毎日出勤し、ボーナス、病気休暇、有給休暇などもある。工場

の忙しい時期の短期間募集もあり、その場合は、他の副業や家事の合間に働く女性が増えていて、おもに中小規模農家の女性が副業として家業以外の時間に工場で働いている。今まで、季節労働をしていた農村の男女でも部分的な工程作業で単純仕事が多く、労働者のスキル向上には繋がらないが、安定した収入を得られる工場で働く人が増えている。

このような近代的な縫製工場で働く女性が調査対象者の44人のうち7人もおり、20代の若い女性の新しい就業の場となり、安定的で農業労働よりやや高い収入を得ているが、工場での仕事は単純反復労働で、力仕事も多く休み時間が少なく激務でありながら高度な技術が身につくわけではない。また急な残業もあり、いままで農業に使われていた時間も工場で働くことが多い。工場での仕事に不満を持っている女性が多いが、収入がある程度安定的であることから続けているといえよう。

(3) 農村女性の副業収入

1) 副業的就業の諸形態と収入

対象者44人のうち40人は家業としての農業の他に副業に従事している。農村女性の副業収入を、表2のように5つの階層に収入を区分してみるとその職種と特徴は以下のとおりである。

もっとも収入の少ない第I階層では、月5,000ルピー（日本円換算5,600円）以下の収入で、その主な業種は伝統的な副業的畑農業、農産物加工、手芸などである。その中でも畑農業では農業近代

表2 女性の副業等の業種別に見た収入階層別人数

(単位:人、%)

	合計	I	II	III	IV	V
		5千ルピー未満	5千~1万未満	1万~1万5千未満	1万5千~2万未満	2万ルピー以上
家畜・畑	15	2	3	5	2	3
苗販売	4	0	1	1	1	1
レンガ作り・販売	4	0	0	1	2	1
農作物の加工・販売	3	1	1	1	0	0
仕立業	3	0	1	1	1	0
日用品販売	3	0	0	1	1	1
手芸作り・販売	2	1	1	0	0	0
農業賃金労働	5	0	1	3	1	0
工場賃金	7	0	0	1	3	3
計	46	4	8	14	11	9
同 構成比	100.0	8.7	17.4	30.4	23.9	19.6

表3 農村女性の学歴と副業などの1月当たり収入金額階層別人数

(単位:人)

	5千ルピー以下	5千～1万	1万～1万5千	1万5千～2万	2万ルピー以上	計
小卒	3	1	0	0	0	4
中卒	1	5	10	2	1	19
高卒	0	0	7	5	5	17
計	4	6	17	7	6	40

表4 農村女性の年齢と副業などの1月当たり収入金額階層別人数

(単位:人)

年齢	5千ルピー以下	5千～1万	1万～1万5千	1万5千～2万	2万ルピー以上	計
20-29才	0	0	4	1	0	5
30-39	0	0	4	2	2	8
40-49	0	3	6	4	4	17
50-59	4	2	3	0	0	9
60才以上	0	1	0	0	0	1
計	4	6	17	7	6	40

化過程の中でもっとも減少し、農作物加工は需要が少なく安定した収入を得ることが難しい。手芸については政府やNGOの援助で講座を受けて最近はじめられたばかりの職業で、生活のためというよりも、手に職を付ける段階のものとしてやっている人が多い。

第Ⅱ階層では、5,000ルピーから1万ルピーの間の区分で、苗販売と仕立業が入っている。これらの仕事は信頼関係で成り立っていて開始当初は大変だが、重労働ではなくその割には収入も良いので良い仕事とされている。

第Ⅲ階層には、調査地域の中でもっとも従事している女性が多く、1万ルピーから1万5,000ルピーの区分で、家畜飼養、日用販売、賃金労働が入る。家畜飼養は規模によって収入が決まるが、養鶏であれば少ない資本でもはじめられるため、調査地域では希望者が多く見られる。農業外賃金の場合は、この地域で最近できた縫製工場の影響を大きく受け賃金も高い。農作業での雇用労働には、長期期間雇用と季節雇用があり、長期間の場合は賃金額に変化はほとんど見られず、季節労働の場合は毎年変化し増加傾向にある。

日用品販売は売る物も値段設定も自分で決められ、比較的高収入となっている。

第Ⅳ階層は1万5,000ルピーから2万ルピーの区分で、レンガ作りが入るが、重労働のためこの地域ではレンガ作る職人が少なく、収入も良い。

第Ⅴ階層は月2万ルピー以上ともっとも収入の多い階層では、縫製工場の常勤労働者や大規模の

家畜飼養の女性が含まれ、安定的で高収入を得ている。

以上のように農村女性の副業および兼業就業の形態は多様であり、かつそれらの所得額はその種類によって異なる。つぎに副業や兼業に従事する農村女性本人の属性と農業経営規模との関係について分析する。

2) 副業収入水準の要因分析

①本人属性(学歴・年齢)との関係

調査地域の女性の学歴は、小卒・中卒・高卒の3つに区分できる。最高学歴は高卒で調査対象44人のうち17人は高卒で、19人は中卒、4人は小卒である。学歴と副業収入との関係は表3にみるように、月1万ルピーから2万ルピー以上の収入を得る女性の中で高卒が多いことがわかる。他方で、もっとも副業収入の少ない月5,000円ルピー以下の階層では小卒の人がもっとも多い。学歴は副業収入に大きく影響しているといえる。

調査対象女性の年齢階層別人数は、20才代は5人、30代は8人、もっとも多い40代は17人、50代は9人、60代は1人で、最年少27歳で最高齢は62歳であった。年齢と収入の関連については表4のように、年齢が若いほど高収入を得ることのできる副業や兼業に従事していることがわかる。その理由として、年齢の若い女性は社会の変化につれて高学歴を持ったこと、それによって行動範囲が広がり情報が得られたこと、政府による若者中心の援助を受けられることが上げられる。

以上のように、農村女性の年齢や学歴と、副業

表5 農村女性の学歴と年齢階層別人数

年齢	(単位:人)			
	小卒	中卒	高卒	計
20-29才	0	1	4	5
30-39	0	2	6	8
40-49	0	10	7	17
50-59	3	6	0	9
60才以上	1	0	0	1
計	4	19	17	40

表6 農業経営規模別に見た農家1戸当たり収入額と構成

		単位:万 ^円 、%			
		農家総収入	農業収入	世帯主の農外収入	女性の副業収入
実 額	全平均	62.2	21.8	27.6	12.7
	小規模農家	39.8	9.9	12.4	17.5
	中規模農家	46.4	20.6	11.0	14.8
	大規模農家	84.4	28.5	46.9	8.9
所得構成	全平均	100.0	35.0	44.5	20.5
	小規模農家	100.0	24.9	31.2	43.9
	中規模農家	100.0	44.4	23.6	32.0
	大規模農家	100.0	33.8	55.6	10.6

等の種類そして収入額とは強い関係があるといえる。表5にみるように、年齢と学歴とは強い相関があり、若い女性ほど学歴が高く、近代的な農村工場の常勤労働者となって比較的高い所得を得ているといえる。

②農業経営規模と女性の副業等の就業形態との関連

これまで小規模農家の女性は季節労働者として大規模農家の下で働いていたが、季節的な農業労働賃金より安定した収入を得られる縫製工場で働くようになった者が少なくない。前述の表1に見るように、小規模農家女性は1つ以上の副業ないしは兼業に従事しており、それは農業関係の副業より、比較的安定的な収入を得られる農業外副業である日用品販売、工場での労働などが選択されている。経営規模が小さいほど副業での収入が高いことがわかる。

中規模の農家女性の場合、家業は主に水田作、畑作、畜産であるが、水田は水不足などの問題から今以上に栽培ができないことが多く、手元の資金で養鶏を始められる自家消費や販売目的の養鶏に人気がある。その何人かの女性の希望は事業として産卵鶏を購入し将来プロイラーとして販売することである。そのために生後1週間以内の雛を購入するためには少なくとも2.5万ルピー（日本円にして2.7万円）の資本投資が必要である。また取引中心の品種選び、雛を獣医にみてもらったり、流行病などに対しての予防接種が必要であっ

たりと多くの経営的リスクもあるが投資は少なくその割には比較的安定した収入を得ることができる。

調査対象者のうち副業などを持っていない4人の女性は、すべて経営規模の大きい農家層に属している。

以上のように農業経営規模によって、女性の副業などの有無、また種類と収入が異なり、小規模農家の女性では常勤的な工場勤め、中規模層以上では様々な副業などへの従事が一般的であり、そして大規模農家層では副業などに従事しない女性が相対的に多いといえる。

また総括的に農家総所得の収入源別にその構成比と、農業経営規模とそれぞれの関連を調査農家の全体についてみたのが、表6である。農家総所得に占める農業所得の割合は35%であるのに対して、世帯主の副業等の収入割合は45%を占め、また女性の副業収入等は20%を超えている。そして経営規模との相関は、農業所得だけではなくいずれの項目でもあるといえる⁴⁾。したがって調査対象地域では副業等の収入によって所得が平準化するのではなく、兼業等の収入も含めた農家総所得でその相関はもっとも強いことに見られるように、経営規模階層間の経済的格差の拡大が示唆されるといえよう。

そのなかで農村女性の副業等の収入が農家の総収入に占める割合は、表6にみるように、小規模

表7 女性の年齢階層別に見た副業収入の使い道

(単位：人、%)

年齢	家計に入れる	自分の物を買う	子供の物を買う	貯金する	夫に渡す	回答計
20-29才	0	4	3	2	0	9
30-39	2	4	13	6	0	25
40-49	15	4	12	13	2	46
50-59	10	0	1	3	5	19
60才以上	1	0	0	0	1	2
計	28	12	29	24	8	101
同構成比	63.6	27.3	65.9	54.5	18.2	—

注：複数の回答あり、各構成比は調査実人数の44人で除した値。

農家では43.9%と最も大きな構成部分となっているのに対して、中規模農家では32.0%と農業所得より低く、また大規模農家層では10.6%を占めるに過ぎない。このように農家経済における女性の副業等での収入の意義は、経営規模によって異なり、経営規模が小さい農家層ほどその経済的意義は大きいといえる。

3. 農村家庭における女性の役割

(1) 女性の副業収入の使い道

表7に見るように、女性の副業収入の使い道でもっとも多い回答（複数回答）が、子供の物を買うということ、その次は家計に入れる、もっとも少ないのは夫に渡すである。夫に渡すという回答者はすべて40才以上の女性で、その理由はお金の使い道は夫に決めてもらうためと答えている。20代、30代の女性の場合、使い道は自由に自分で決めていることがわかる。

家計に入れると回答した女性の理由として、第1に、副業は家計を支えるためであり、第2に、家業の農業収入だけでは生計が立てられないこと、そして第3に、副業で家族員の協力を得ていることが挙げられている。

ほとんど自分の物を買うために使うという女性は、家業での収入では自分の物を買える余裕はないからという理由を挙げている。また副業収入で普段買えないような子供の物を買うという答えもある。

最近の傾向では女性の副業収入の一部を貯金することが目立っている。金額は決まってないが、ほとんどの女性が月いくらかを必ず貯金している。それは事業の拡大、機械や家畜の購入、子供

の教育資金に当てたいなど、その理由は様々である。もっとも多い目的は、事業の拡大と子供の教育資金で、年齢が若くて、学歴の高い女性は大きな希望を持って貯金に励んでいることがわかる。また40才代後半の女性は、家畜飼養などの農業規模を拡大する資金のために貯金していると答えており、経営規模の拡大と機械購入資金のためという理由も多く、その場合は決まった金額を定期的に貯金している場合が少なくない⁵⁾。

(2) 経営への関与と家計管理

家計管理には44人のうち34人と、ほとんどの女性が関与している。しかし農業経営での決定権については、表8に見るように、44人のうち22人は夫などが決めるとし、16人は夫婦で決める、6人は夫が居ない場合も含めて自分で決めていると答えている。20才代や30才代の比較的若い女性の場合は、経営方針については夫婦で決めており、50才代は夫の決定に従うという傾向が見られる。

女性の経済的自立性について自己収入の扱いについてみると、44人のうち35人、80%の女性が独自の収入源を持ち、支出についても28人、64%の女性は自分で用途を決めているなどの自由度を有していることがわかった。

女性の副業などを続けるかどうか、得られる収入の使い道については女性がある程度は自分で決定しているといえるが、子供の教育、病院へ行くなどの項目、家畜を買う、農業機械を買うなどの金額の大きい項目、贈り物の購入、親戚関係などの外部との関係を伴うような項目については男性が決定することが多いことがわかった。しかし、副業収入を得る活動に従事していない女性の場合も同様の傾向があることが今回の調査でわかった。したがって農村女性が収入を得ていることは

表8 農業経営に関する決定権について

(単位:人、%)

年齢	夫が決める	妻が決める	二人で決める	計
20-29才	0	1	3	4
30-39才	1	3	4	8
40-49才	9	2	9	20
50-59才	11	0	0	11
60才以上	1	0	0	1
計	22	6	16	44
同構成比	50.0	13.6	36.4	100.0

家族内における決定権にあまり影響をしないということになる。女性の副業収入の家計における重要性は、家族の男性にも認められているが、この認知が世帯における決定権に直接反映されるわけではない。

4. 小活

農業の近代化過程において、生産資材の高騰、作物販売価格の低迷などを原因として農家収入の低下により、農村女性は今までの家業としての農業の他に副業に従事するようになった。調査地域における農村女性の副業等の就業形態は、伝統的な農業関係の副業から近代的な農村工場での常勤労働まで、多様である。

学歴や年齢などの本人属性と収入額との関係を見ると、伝統的な業種でも重労働であるレンガ造りなどでは比較的収入が高いが、一般的に高収入の者については、若年—高学歴—工場労働という新しい関係の形成が見られる。女性の労働能力に関しては、世代間で学歴差が見られるように、農村でも女性の社会的能力は向上しているといえよう。

また農家の経営規模との関係では、自家の農作業の少ない小規模農家の女性ほど農外就業の割合は質量ともに高いといえる。そして農家収入に占める女性の副業等からの収入の割合は、平均で20%、とくに小規模農家では43.9%と最大の収入部門となっている。

しかし働く場所があっても女性の生活向上は図られないことが多く、女性の家庭内での発言権などの地位は依然として低位な状況にある。

農業就業では、田植えや収穫、取入れなどの作業は女性の仕事とされており、たとえ男性は失業

していても従事しないのが一般的である。また家事においても、稲作農業の季節労働者として働いている女性はその時期はとくに忙しくなるが、男性が分担することはほとんどない。その上、女性労働の賃金は同等の仕事量にもかかわらず、賃金格差が生じている。女性の収入は家計にとって重要であると男性にも認識され始めているが、他方では女性の仕事は単純で楽であるという伝統的な意識も残っている。また毎朝牛乳を搾り協同組合に持っていく女性はあるが、酪農協同組合では夫などの男性が組合員となっていて、男性にのみ代金が支払われるなどの事例もある。

このように、スリランカの農村女性は、家の農業や家事・育児にも従事しながら、副業などによって家計を支えている収入を得ているにもかかわらず、その労働は家庭内で正当に評価されるとはいえない。農村女性の経済的自立を促すために、技術習得の機会や起業のための資金援助制度の一層の整備が必要とされている。

注

- 1) アジアに限らず開発途上国の農村女性は三重の格差に苦しんでいる。それは先進国との格差、男性との格差、都市との格差である。途上国の経済発展のために、識字率の低い農村女性を対象として技術や行政上の必要事項を伝え、経済的・社会的自立をはかることが大事な課題とされている。参考文献の1)、2)、3)を参照。
- 2) 筆者はLal Thilakarathneと共著で「Economic Conditions of Rice Farmers Using Modern Agricultural Processes in the Dry Zone of Sri Lanka—a case of Anuradapura District, Eppawala Area」農業市場研究、9-1、34-45、2000年を公表した。
- 3) 調査対象地区では、統計が十分整備されていないため、人口等のデータは聞き取りによる。農家の選定は、エッパウラ村には比較的水田経営規模の大きい伝統的集落の地区とマハベリ開発地区で3エーカーの水田の配分を受けた新集落の地区、そして商店街のある非伝統的集落の3つの地区から構成されている。対象農家は訪問しやすい3つの地区が近接した地区内の農家とし、個々の農家の選定に当たっては調査時に在宅しているなど調査に対応可能な農家とした。また農家1戸で複数の女性が同居している場合は、若い女性についてのみ調査表にもとづきヒヤリングを実施した。
- 4) 農家の経営面積と収入源別に見た収入項目との相関係数は、農家総収入0.8663、農業収入0.7910、世帯主の副業等の収入0.5677、女性の副業等の収入-0.6995

であった。また、ここで「収入」とは販売額から生産資材費を差し引いた金額であり、被雇用の場合は賃金額である。

この所得構成について特筆すべきことは、大規模農家層の世帯主の副業等の収入の多いことである。これらの主要な業種は、高利貸しや農産物の集荷・販売などの「サイドビジネス」的収入であり、農村地域での金融や農産物流通の公的システムの未整備がその形成要因となっているといえよう。

- 5) 農家ヒヤリングでは、家業での経営規模拡大や機械購入などのため借金している農家もあることがわかったが、それは政府の低金利や金利無しの借金であり、女性自身の借金はほとんどない。

参考文献

- 1) D. P. アプテ編『インドの農村女性』インド川上やまと教授基金を支援する会, 2004年。
- 2) 人間開発報告『グローバルなジェンダー格差』UNDP出版, 1997年。
- 3) 人間開発報告『貧困と人間開発』UNDP出版, 2004年。
- 4) 鳥居高編『発展途上国の市場と暮らし』アジア経済研究所, 1997年。
- 5) 矢内原勝編『発展途上国問題を考える』劉草書房, 1996年。
- 6) 東京農業大学編集・発行『新世紀の食と農と環境を考える』2002年。
- 7) 『スリランカをしるために』国際婦人教育振興会発行, 1997年。
- 8) 『スリランカの経済社会の現状』国際協力推進協会出版, 1997年。
- 9) 『いま, そして未来へ インドにおける女性リーダー育成事業の記録』SOMNEED出版, 1999年。
- 10) 日本労働研究機構編集・出版『発展途上国の雇用開発』1995年。